

城北会千葉支部会誌

第3号

平成 18 (2006) 年 11 月

城北会千葉支部

はじめに

城北会懇親総会は今年も7月8日に京王プラザホテルで行われました。毎年400～500名の方々が集まっています。

城北会にはその他に各地域毎の支部があり、北海道城北会、関西城北会、千葉城北会、紐育（ニューヨーク）城北会などがあります。

その内でも我々の千葉城北会は平成16年に発足された会誌第1号でまとめられたように発足の時点も早く、又長く続けられており、これからも続けていきたいと考えています。

その他にも会社の城北会（東芝など）、大学の城北会（北里など）があり、又業界全体の城北会としては都市・建築城北会（昨年まで建築城北会であったものを名称変更した。）があります。

案内の内容をみますと毎年300余通の案内を出しますが出席者は30～40名であり、もっと多くの方の出席が得られるようにしたいと考えています。

今年の会誌3号は三瀧正道氏（S42年卒）の講演の内容の紹介、重松高明氏（S18年卒）の四中時代の話をもとめました。今年は会員の寄稿も増えましたので今後も皆様の御協力を得て会誌も充実させ発行を続けたいものと思います。

平成18年11月

城北会千葉支部

支部長 尾崎英二

<投稿原稿>

日本とミャンマーの絆

井田 武宣 (S31)

1. プロローグ

「ミャンマーって何？」

「国の名前かあ。知らなかった」

「昔はビルマと云っていたのだよ。1988年に国の名前が変わったのだ」

「アウンサン・スー・チー？女性でしょ？軍政権によって監禁されているのでなかったかしら」

「彼女は、ノーベル平和賞もらっているらしいよ」

「そうかあ」

「軍事政権って何か怖い感じがする」

「街を歩いていて怖いという意識は浮かばないよ。市街は笑顔であふれているし、一度行ってごらん」

「『ビルマの豎琴』知っている？」

「竹山道雄さんの小説でしょ。でも、竹山さんはビルマに行ったことがなくて書いたのだから。なんか凄くない？」

「中井貴一主演で映画にもなったなあ」

「日本兵の水島上等兵が、戦後ビルマに残って戦友の慰霊をする物語で、戦争の悲惨さを淡々と語っているのがいいね」

「でも、小説は、ビルマ人には人気がないみたい」

「どうして？」

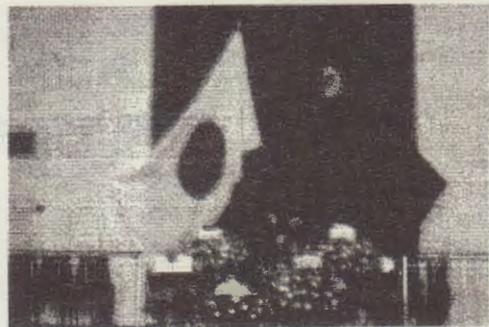
「僧侶がビルマの豎琴を弾くのが不自然なのだから。日本で云えばお坊さんが三味線を弾きながら巡礼するようなものらしい」

「やはり、国が変われば価値観が違うし、見方が違うなあ」

「そういえば、私のおじいさんがビルマで戦死している」

「それはお気の毒ですね。ビルマでは約18万人の日本の将兵が戦死しているし、最も悲惨な戦闘はビルマを経てインド領まで進攻した『インパール作戦』なのだよ」

「戦場になったのだったら、反日感情も強いのでしょうか？」



「確かに戦争は、戦場になった人達が一番悲惨だよ。このことは忘れてはいけないね。でも、日本と協力して独立を勝ち得たことと日本の軍紀が良かったのか、中国や韓国のような反日感情を直接感じることはないよ。賠償も放棄しているくらいなもの」

日本人のミャンマーに関する知識は良くてこのようなものである。

どうしてこんなにミャンマーという国が知られていないのだろうか。

その理由は、日本にとってミャンマーという国が政治的、経済的に利害関係が薄く関心がないこと、メディアがミャンマーに常駐できないためにタイムリーにニュースにならないことにある。

私は、1980年4月から3年間にわたり在ビルマ日本大使館に勤務し、それ以降ビルマ・ミャンマーに関心を持ち、ミャンマーが軍事政権であろうと「ビルマ大好き人間」になってしまった。

それは、貧しさに関係のないビルマ人の笑顔、心の優しさは真の心の豊かさを感じてしまうからである。

2. 日本軍との関係

ビルマは、英国の植民地であった関係で、1940年以降、青年活動家アウンサン（スー・チーの父）を中心にビルマ独立運動が高まり、一方、日本は鈴木大佐を長とする特務機関として南機関を発足させ、ビルマを経て中国支援ルートである援蒋ルートへの遮断（インパール作戦につながる）とビルマの独立を支援するという事でビルマ工作を実施し、日本・ビルマ双方の利益が一致したのである。



アウンサン將軍

このような背景のもと、アウンサン以下ビルマの30人の独立運動の志士は、1941年6月に日本船でラングーン港から脱出し海南島で日本軍の軍事訓練を受け、12月8日、太平洋戦争の開戦とともに南機関員とともにビルマ独立義勇軍を編成し、英国からの独立をスローガンにビルマ南部に上陸した。

独立義勇軍及び南機関は、首都ラングーン（現ヤンゴン）を含むビルマ南部を占領した段階でビルマ人による臨時政府設立を考えていたが、日本軍部は、先ず日本による軍政を敷くことが先決で、ビルマの独立は尚早と考えており、考え方に相違が生れてしまった。

長い英国の植民地支配に抵抗し、日本軍と共に戦い、ようやく英国を追い出しただけにアウンサン以下は日本軍に対する失望は強かった。そのうち、英印軍の反撃が始まり、日本軍の旗色が悪くなると、このままでではビルマが再び英国の植民地になってしまうという判断のもとに、1945年3月27日に突然、日本軍に反旗を翻した。

これを記念して3月27日をビルマの国軍記念日とし、暫くは「抗日デー」と紙上

に表現していたが、今では、「反ファシストデー」と表現している。これは、親日的なビルマ政府が~~対日戦時賠償を放棄し、その代わりに日本から多額の経済援助を受けた~~ **対日戦時賠償を早期に解決しその後** こともあり、最大限、日本に気を使って修正したものである。

ビルマ人は、確かに日本軍がビルマ独立の恩人であることは良く知っているが、それを日本人が恩着せがましく云うと直ぐ横を向いてしまう。ここにもビルマ人のプライドが見られる。

日本軍と共に「英帝国主義と戦った」という意識は強いが、「日本ファシストと戦った」という意識もあり、ビルマ軍の創設経緯から自分たちは日本軍の傀儡でないということを強調する必要性から、「ファシストと戦った」ことを強調しているように思える。

3. 日本軍の伝統の継承

日本で軍事訓練を受け、共に英印軍と戦ったということで、ビルマ軍は、日本軍の影響を受けていることは間違いないし、むしろ誇りとしている。

それは国軍記念日の観閲式を見学するとよくわかる。

観閲式の行進曲は「肩を並べて兄さんと・・・」の曲である。

ビルマの軍歌は、「抜刀隊」など日本軍の軍歌が多く、ビルマ将校の日本軍歌の評価は、日本の曲は勇ましくて良いということである。

また、ビルマの軍人は、「我々は日本軍の伝統を受け継いでいる」と自負している。ビルマ軍は、家族とともに駐屯地に起居しており、反政府軍が攻撃してきたときも決して逃げず、玉砕を覚悟で駐屯地と家族を守る。彼等は、「かつて、日本軍は、十数倍の敵と戦った」と云い、日本軍を尊敬しており、我々も「日本軍のように戦うのだ」と云う。このようなビルマ軍の誇りが、今日までビルマの独立と平和を支えてきた。

また、南機関の鈴木大佐は、ビルマの独立のために献身的に働いた人として尊敬されている。鈴木大佐がいかにビルマ独立軍を育て、ビルマの独立のためにいかに尽力されたかについて、30人の志士の一人であるネ・ウィン（前大統領・議長）からビルマ国軍将兵に語りつがれており、国軍記念日に開催される国軍の歴史の展示会場には、必ず鈴木大佐関連の資料が展示され、その業績が広く国民に紹介されている。

1981年には南機関の業績を称え、鈴木大佐の未亡人他7名の南機関員がビルマ政府に招聘され、最高勲章である「アウンサン称号」の授与式が評議会（国会）で行われた。

日本とビルマは一時敵味方に分かれて戦争をしたこともあるのにもかかわらず、敵方の者に勲章を授与する例は世界でも ~~珍らしい~~ **珍らしい** (SEE General Curtis LeMay)

4. ネ・ウィン政権時代

戦後、ネ・ウィン大統領を中心とする旧軍人による政権が長期間継続したが、経済政策は失敗し、1987年12月に国連より後発開発途上国最貧国に認定されてしまいネ・ウィン体制は崩壊した。

この間にあつて、日本は、経済支援国の80%を占める最大の援助国としてビルマの発展に寄与しており、ビルマ人にとって日本は憧れの国であり、最大の支援国として扱い、親日的であった。



ネ・ウィン大統領

チ・ライン外務大臣の持ち歌は「♪向こう横丁のタバコ屋の看板娘・・・♪」だった。「♪見よ、東海の空明けて、旭日高く輝けば・・・♪」の愛国行進曲などを知っている人も多かった。

このように多くの政府要人は、日本を好意的にみてくれていたが、日本から来る政治家は、ビルマ政府要人にワンパターンで太平洋戦争の謝罪をする。横から聞いていると、何かビルマ人の気持ちとフィットせず、「謝罪しなくて良いのになあ」と思ってしまうこともあった。

5. 新軍事政権の誕生

1988年、全国的な民主化デモにより軍OBを主体とする社会主義政権が崩壊したが、国家の危機感を感じた国軍がデモを鎮圧し、国家法秩序回復協議会(SLOC)を組織し、軍事政権が新たに誕生した。これが今日まで続いている。国名も「ミャンマー」となった。

たまたまイギリスから帰国したアウンサン・スー・チーは、国民民主連盟(NLD)の書記長となり、軍事政権に対抗して反政府活動を行い、1990年に選挙を行なった。

その結果、国民民主連盟が圧勝したが、軍事政権側は民政移管には堅固な憲法が必要であるとし、選挙の結果を無視し、今日まで政権移譲せず、かつ、アウンサン・スー・チーを1989年以降3回にわたり自宅軟禁、若しくは拘束して今日まで続けており、国民民主連盟の活動を事実上不可能にしている。

この2点が西欧諸国にとって容認できないことであり、日本を含め経済援助を中止している理由である。

日本は、2001年には無償資金協力21.2億円、技術協力33.2億円の援助をしていたが、西欧外交に追随し、2003年以降南風政策から北風政策に転換し新規案件のODAを中止している。

6. 最近のミャンマー

日本に代わって中国、インド、韓国が進出している。

中国及びインドはミャンマーの内政に関心を示さず自国の権益を優先して友好関係の緊密化を図っている。

特に、中国は、自国の経済発展、特に雲南省の発展のためにもミャンマーの労働力と近代化が進んでいない膨大な市場は魅力的であり、更に今後もミャンマーに接近するものと思われる。

一方、ミャンマー政府は、中国の支援が得られるから日本など西側の支援を必要としないと考えている。

また、2004年、ミャンマーの民主化は明らかに後退してしまった。5月に憲法制定に向けた国民会議が8年ぶりに再開されたが、アウンサン・スー・チー率いる国民民主同盟が頑なに会議をボイコットし、国民民主同盟の和解の場を失い、10月には開放経済推進派で、アウンサン・スー・チーと軍政のパイプ役だったNO2のキン・ニュン首相が権力闘争に敗れ解任され、かつ彼のバックボーンであった軍情報局(Military Intelligence Service)も解体されてしまったのである。

このため、NO1のタン・シュエ議長の権限は、益々強大になり、例えば、2006年3月に突如としてヤンゴンからインフラ整備不十分なビルマ中部の町ピンマナ(王都：ネービードーと呼称)に国防上の理由で首都機能の移転を強行するなど独走し、これを止める側近がない。ネ・ウィン独裁体制時代に時計のネジを戻してしまったように見える。

7. 今後のミャンマーとの関係

経済援助のないのが縁の切れ目で、また、世代交代が進み、今や親日感情も陰りが出てきてしまっている。

昔は街を歩いて「日本人ですか?」と聞かれることもあったが、最近は「中国人ですか?」「韓国人ですか?」と訊かれる時代になってきている。

日本のミャンマー関係者、日本軍将兵や在ミャンマー日本大使館の人達が戦前から今日まで築いた親日という努力や財産を限りなくゼロにしてしまったことは残念であり、影響力の減退の虚しさを感じる。

確かに軍事政権には問題はある。軍事政権の見解は、民政移管をすると少数民族の反政府運動によって体制を根幹から体制を覆されるリスクを負っていること、アウンサン・スー・チーの解放もこれを助長するものであると主張する。

ミャンマーは、多くの少数民族問題を抱えており、独立を掲げている反政府運動を展開する民族もいるので、他国の云うように容易に民政移管できない事情がある。また、アウンサン・スー・チーの率いる国民民主同盟の妥協をすることの知らない姿勢もこの問題解決を複雑にしている。また、アウンサン・スー・チー自身が英国人と結

婚し、豊かな生活をしてきており、軍政の弾圧もあるが、国民感情的に日本で想像するような国民的英雄にはなっていないのが実態である。

ミャンマーの人達は、誇り高く、第三者からの干渉は大嫌いな民族であり、外国の意見は聞きたがらない。「ミャンマー人は、ミャンマー人の手で国内問題は解決する」というのが基本スタンスである。そして、ミャンマーは、長い間、鎖国的な状態で、ようやく1997年にASEANに加盟したのであり、政府要人の国際感覚が遅れている国でもある。

そして、日本とミャンマーの太かった絆も将に切れようとしている。

このような国、ミャンマーとどう付き合っていけばよいのか、難しい問題である。

やはり、アジア政策全般を考えたとき、ミャンマーの内政問題を棚上げし、中国のミャンマー進出、覇権主義の阻止を第一義とする視点で捉え、かつ、人権を振り回す西側外交と歩調を合わせない独自の外交政策が必要であり、日本の権益を重視した二国間外交を推進しなければならないと思う。

その上で軍事政権に対しても少しでも民主化のプロセスを前に進めるよう継続的に働きかけなければならないと思う。

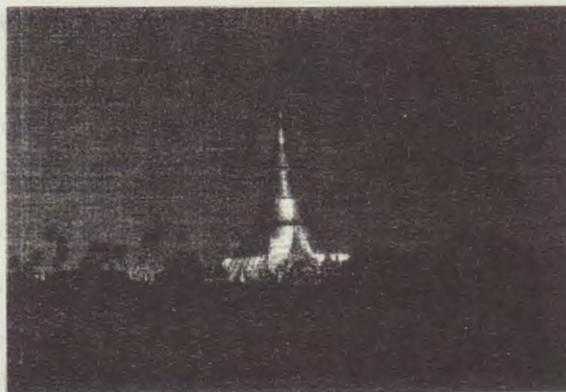
それには、日本の政府要人が、日本とミャンマー関係の歴史を知り、親密な交流が必要である。

日本の総理大臣が最後に訪問したのは福田総理による1977年で、30年近く訪問していないのだから、日本との友好関係も薄れて行くのも無理はない。1983年3月に安倍晋太郎外務大臣がビルマに来られ、雑談で「ビルマという国は、他の東南アジアの国と違って援助をねだってこない国で、可愛げのある国だ」と云う趣旨を語っていた。父親に随行してきた29歳の安倍晋三青年秘書が総理として再訪問を期待したい。

しかし、中国よりの現軍事政権下においては人脈も少なくなり、外交は難しくなる一方であるが、新たに人脈を構築し、中国やインドの戦略を阻止するためにも経済援助再開を含む南風政策により、貧しくてもプライドの高い国「ミャンマー」との良い関係を発展・維持してもらいたいものである。

「次の世代でもう一度、『日本』とパコダの国『ミャンマー』の絆を強く！」と願うばかりである。

(*国名の変更により1988年以降は「ビルマ」を「ミャンマー」として記述する)



ゴダの国のシュエダゴンパコダ

◆投稿のお願い

城北会千葉支部会誌は、毎回、定期総会に合わせて年1回発行しております。皆様の投稿をお待ちしております。

学校時代の思い出、現在の仕事柄感じていること、教育についてのご意見、ご趣味について、随想等何でも結構です。

投稿は毎年9月末までをお願いします。

投稿は下記事務局まで、Eメールまたは郵送にてお願いいたします。住所、氏名、卒業年次をご記入ください。

城北会千葉支部会誌 第3号

平成18(2006)年11月発行

発行：城北会千葉支部

支 部 長 尾崎 英二 (昭31)

副支部長 齊藤 徳浩 (昭32)

副支部長 本橋 輝明 (昭34)

顧 問 齋藤 和子 (昭29)

事務局：〒273-0042 船橋市前貝塚 270-25

本橋 輝明

電話 090-6021-7397

E-mail: mteruak@attglobal.net